

令和 2 年 6 月 25 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02673

研究課題名(和文) 付属語音調変異の同時的な動態記述と変異生成機序の解明

研究課題名(英文) Phonological description of tonal change observed in Japanese functional morphemes and elucidation of the growth mechanism of the tonal neutralization

研究代表者

那須 昭夫 (Nasu, Akio)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：00294174

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：式保存型付属語とは、その結合対象である動詞での二型の音調対立を文節全体に継承する性質のある付属語のことで、「ながら・たい・そうだ」が代表的な例にあたる。近年、これらの付属語の音調には注目すべき変異が生じている。その結果、従来あった二型の音調対立は、一型のパターンへと中和しつつある。

本研究では、式保存型付属語での音調変異と中和の実態を、南関東地域での臨地調査を通じて明らかにした。また、実態の記述に加え、(1)活用形による違い・(2)前接動詞のモーラ数・(3)周辺文節の音調指定のあり方が、中和の発生に影響する音韻的要因として干渉していることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義として特筆できるのは、現在まさに眼前で変化を起こしつつある現象の姿を同時期的に追跡し、音調変異(中和)の実態を記述し得たことと、中和の成否を左右する音韻的要因を突き止めたことである。変異の現状を逸することなく捉えられたことは、本研究の大きな成果であり、今後の言語変異研究に寄与する部分も大きい。

変わりゆく日本語の動態を実時間で捕捉することは、言語学の成果として貴重であるとともに、母語である日本語の現状に対する人々の認識の深化にも貢献し得る点で、その社会的意義も大きい。変異の最中にある現象の実態を捉えることで、より実像に近い日本語の姿に迫れたことが本研究の意義である。

研究成果の概要(英文)：Tone-preserving functional morphemes are characteristic in that they transmit the two-pattern tonal contrast in verb stems to which they are suffixed to the verbal phrase. Morphemes as ‘-nagara’, ‘-tai’, and ‘-sooda’ are representative examples. However, a remarkable tonal change is recently emerging. Verbal phrases containing these suffixes consistently realized with a pitch fall regardless of the tonal specification of the preceding verb stem, resulting in a simpler neutralized system.

In this study, several fact-finding surveys were undertaken. They provided a detailed description of the actual state of tonal variation and neutralization. Besides, this study elucidated the following phonological factors which exert influence on the growth of the tonal neutralization: (1) Types of inflectional category of the auxiliaries, (2) Phonological length of verb stems, (3) Tonal property of phrases surrounding the verbal phrases containing the tone-preserving functional morphemes.

研究分野：言語学・音韻論

キーワード：アクセント 式保存型付属語 音調変異 中和 起伏化 日本語

1. 研究開始当初の背景

現代日本語に生じるアクセント変異については、従来、外来語名詞・形容詞・複合動詞などの自立語に生じる現象が主たる分析対象とされてきた。一方、付属語を含む形式に生じるアクセント変異に関しては研究が乏しく、等閑視されてきたきらいがある。

しかしながら、近年、一部の付属語において、これまで報告されることのなかった音調の変異が生じ始めている。「式保存型付属語」(NHK 2016)と呼ばれるタイプの付属語がそれで、具体的には「ながら・たい・そうだ」などの助詞・助動詞が該当する。これらの付属語は本来、その結合対象である動詞(前接動詞)の音調に対応する形で文節の音調を作る性質がある。前接動詞が平板動詞であれば文節全体の音調も平板式となり(例(1)「笑いそうだ」)、前接動詞が起伏動詞であれば文節全体の音調も起伏式になる(例(2)「怒りそうだ」)。

(1) わらう= : わらい-そうだ=

(2) おこ]る : おこり-そ]うだ

ところが、昨今の共通語では、この規則に従わない音調が観察されるようになってきた。すなわち、(1)において、本来平板式で実現されるべき文節が「わらい-そ]うだ」といった起伏式で起こる変異である。こうした起伏化の事実と言及した研究は皆無というわけではないものの、散発的な事例の報告が中心であり、網羅的な調査を通じた実態把握には至っていない。

付属語音調の変異が従来見過ごされてきたことは、直近改訂のアクセント辞典(NHK2016)においてさえ、上述の事実が参考情報として付記されているに過ぎないことからもうかがえる。しかしながら、音声の変異が比較的速やかに進行する性質を備えていることを踏まえると、発生して間もない音調変異の実態を速やかに捕捉することは、変わりゆく言語の姿を逸することなく捉えるという意義に照らして、まさに喫緊の課題にほかならない。

2. 研究の目的

本研究の第一の目的は、式保存型付属語「ながら・たい・そうだ」を含む文節に生じつつある音調変異の実態を、録音調査に基づいて明らかにし、記述することである。首都圏地域で生育した若年話者の音調実態を把握することにより、変異を来しつつある「日本語アクセントの現在」を同時代的に捕捉することを目指した。

第二の目的は、音調変異に影響を及ぼす言語的要因ならびに変異の進行を支える機序について、記述・理論の両面から明らかにすることである。式保存型付属語を含む文節での音調変異は、何の秩序もなくまったくランダムに生じているとは考えにくい。変異の生起頻度や進行の度合いに影響を与える条件・環境の存在が予測される。この予測に基づいて、本研究では、変異の進行を促進する音韻論的な要因の解明を目指した。また、式保存型付属語での音調変異は、中和現象のひとつである。中和は一般に「体系の単純化」を指向するが、本研究で考察対象とする付属語音調の変異がそうした指向性を示すかどうかは検討を要する問題である。そこで、類似した特徴を示す他の音韻現象との異同等も含めて現象を精査することで、式保存型付属語での音調変異の音韻論的性格を検証することとした。

3. 研究の方法

音調変異の事実を捕捉すべく、録音調査を実施した。助詞「ながら」を含む形式(ナガラ節)については33名、「たい」を含む形式(タイ節)については25名、「そうだ」を含む形式(ソウダ節)については45名の若年者(中学生~大学生)を調査対象者とした。ナガラ節・タイ節については全員が南関東出身者である。ソウダ節については、45名のうち22名が南関東出身者である。調査に際しては、どの付属語に関しても共通の組成からなる短文を予め作成しておき、それを話者に読み上げてもらった。「X+V-付属語+Y」からなる短文である。Vは付属語に先行する動詞(前接動詞)で、すべて平板動詞とした。Xは、付属語含有文節の前に位置する文節(先行文節)で、Yは後ろに位置する文節(後続文節)である。たとえば「文句を言いながら書いた」「公園で遊びたい子ども」「暑さに負けそうな選手」のような短文である。

こうした短文の下線部分をどのような音調で発話するかを調べた。調査の後、得られた音声再生し、すべての発話について、付属語含有文節の音調を聴覚判定法により記述した。当該文節が声の下がり目のない在来の音調(平板式)で発せられていれば「0」の符号を、下がり目のある新型の音調(起伏式)で発せられていれば「1」の符号をつけ、最終的に0/1の二項値からなるデータセットを表計算ソフト上で作成した。

このデータセットに基づいて、起伏化率をはじめとする各種の数値データを抽出し、定量分析の準備を行った。定量分析は次の諸観点に基づいて行った。(1)付属語ごとの起伏化率の比較・(2)活用形別の起伏化率の比較・(3)前接動詞の拍数別の起伏化率の比較・(4)周辺文節の音調別の起伏化率の比較。これらに関する定量分析の結果を得た上で、音調の変異(中和)を引き起こす言語的要因ならびに変異の進行を支える機序について、記述的・理論的な考察を行った。

4. 研究成果

録音調査を通じて、式保存型付属語での音調変異の実態に関して以下の知見が得られた。

(1) 起伏化率（中和生起頻度）の実態

変異の進度は語によって差がある（図1）。最も高い頻度で変異が観察されたのは助詞「ながら」で、分析項目の64.7%で音調の起伏化が観察された。次いで助動詞「たい」では55.3%、さらに「そうだ」では33.3%の項目で起伏化が観察された。なお、「そうだ」の起伏化率は南関東地域出身者22名によるデータに基づく。他地域出身者も含めたデータでは、38.9%の割合で起伏化が観察された。（ 新型音調・ 在来音調）

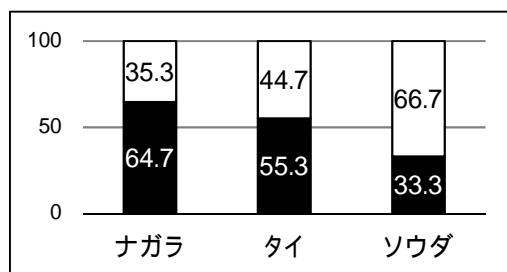


図1. 付属語別起伏化率

上述の結果は、式保存型付属語での音調変異が、共通語において現在まさに眼前で進行中の現象であることを示している。とりわけ「ながら」に関しては、半数を超える勢いで新型が浸透しつつある。ただし、完全な変化として定着するには至っておらず、「そうだ」のように、語によってはいまだ萌芽的な段階に留まっているものもある。

眼前で進行中の付属語音調変異の現状を定量的データに基づいて捕捉したのは、本研究がおそらく初の試みである。音声変異が速やかに進行する性質を備えていることに鑑みると、変わりゆく言語の姿を逸することなく捉えることができことは、本研究の大きな成果であり、今後の言語変異研究に寄与する部分も大きい。

(2) 活用形と中和生起頻度

活用のある助動詞「たい」「そうだ」では、活用形による中和生起頻度の違いも観察された。いずれも終止形が最も変異の進度が速く、連用形にあたる形式は最も遅い。タイ節での結果を一例として図示する。（ 新型音調・ 在来音調）

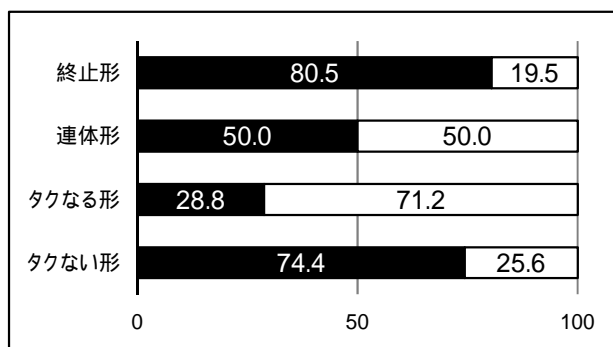


図2. 活用形別起伏化率(タイ節)

見るべき点が2つある。第一に、終止形のほうが連体形よりも変化が速いことである。この点については、第 類形容詞の起伏化においても同様の傾向があることが知られている（稲垣 1984; 三樹 2014 など）。第二に、連用形相当の形式では、主節動詞「なる」に続く形式（例：「行きたくなる」）と否定辞「ない」に続く形式（例：「行きたくない」）との間に、顕著な開きが起きていることである。同様の動態は、やはり第 類形容詞の起伏化現象においても観察される（三樹 2014）。こうした数値の開きについて、本研究では、「タクなる」と「タクない」の統語構造の違いが一因として働いているとの考察を示した。なお、助動詞「そうだ」を含む文節においても、中和生起頻度は終止形（49.7%）> 連体形（37.9%）> 連用形（20.5%）と、タイ節と同様の傾向を示していた。

(3) 前接動詞の拍数別の起伏化率

式保存型付属語での音調変異の進度に影響する音韻特性のうち、最も影響力の強い要因として働いていると考えられるのは、付属語に前接する動詞(前接動詞)の拍数である。本研究では、「ながら・たい・そうだ」のいずれにおいても、前接動詞が2モーラの形式と3モーラの形式と

の間に、中和生起頻度の有意な格差があることを突き止めた。すなわち、前接動詞が2モーラの構造（例：乗り-たい）では中和が有意に抑制されやすいのに対し、前接動詞が3モーラ以上の構造（例：遊び-たい）では、むしろ中和が有意に好発することを捉えた。

（ 新型音調・ 在来音調。横点線は平均値。）

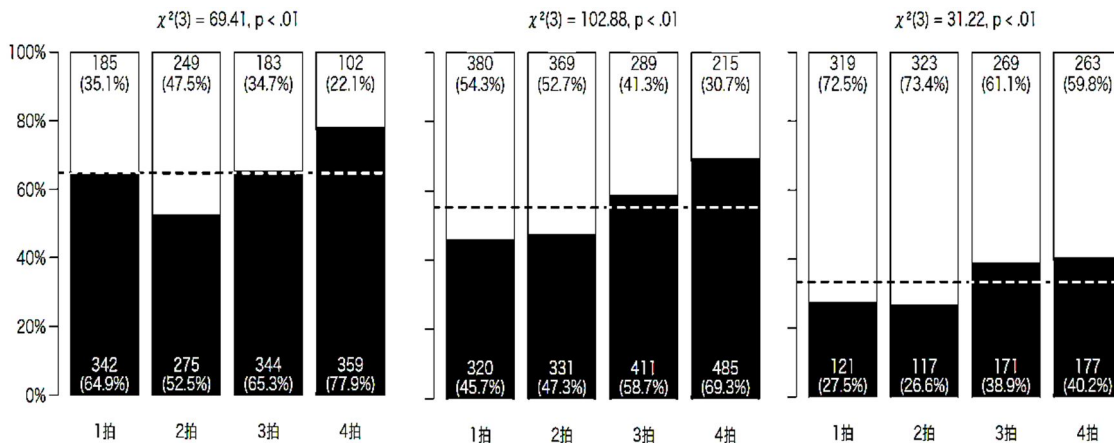


図 3-1. ナガラ節

図 3-2. タイ節

図 3-3. ソウダ節

このことは、2モーラという韻律長が、中和の成否を左右する閾値として働いていることを示唆する。また、全般に文節が長くなるにつれて新型の（中和した）音調が好まれやすくなる点は、形容詞のアクセント変化や、複合動詞での山田法則の衰退（相澤 1992；塩田 2013 など）などにも通底する機序である。

(4)前後の文節の音調による影響

付属語「ながら・たい・そうだ」を含む文節の周辺に位置する文節がどのような音調を持つかということも、変異に干渉する要因として働く。特に、先行する文節の音調の影響は大きい。次の表は、それぞれの付属語について、無核文節先行環境と有核文節先行環境での音調変異の頻度(%)を示したものである。（新型 = 起伏化した中和音調・在来 = 平板を維持した従来の音調）

表 1. 先行文節の音調別にみた中和生起頻度の差

		ナガラ節		タイ節		ソウダ節	
		新型	在来	新型	在来	新型	在来
先行文節	無核	74.8	25.2	61.7	38.3	46.1	53.9
	有核	54.7	45.3	48.8	51.2	31.6	68.4

どの節に関しても、音調の変異は無核の文節が先行する環境において生じやすいことが明らかになった。無核文節先行環境では、たとえ起伏が生じても、連文節内での声の下がり目が1を超えない範囲に収まる（例：シアイニ-マケソ]ーダ（試合に負けそうだ））。一方で、有核文節先行環境では、起伏が生じると声の下がり目の数は1を超えてしまう（例：ア]ツサニ-マケソ]ーダ（暑さに負けそうだ））。このことから、式保存型付属語での音調変異は、連文節というやや大きめの構造を作用域としていること、また、そこでの声の下がり目の数が最大1つに制限されるという形で、中和の成否がコントロールされていることが明らかになった。

(5)総括

以上、本研究では、録音調査を通じて式保存型付属語での音調変異の実態を明らかにした。音調変異（中和）の進行機序に関して、本研究が明らかにした主な知見は次のとおりである。

付属語により変異（中和）の進行強度が異なること。

中和の好発する活用形式（構文上の位置）が存在すること。

前接動詞のモーラ数が有意な影響をもたらすこと。特に2モーラという韻律長が中和の成否を左右する閾値として働いていること。

先行文節の音調構造との相互干渉の下で生じる現象であること。

本研究の最大の成果は、今まさに生じつつある進行中の変化を同時代的に追跡し、その実態を捉えられたことにある。また、中和を促進/抑制する音韻的要因を、定量的分析を通じて明らかにしたことで、式保存型付属語における音調中和の機序の解明という、所期の目的を達成することができた。

なお、本研究の過程では、計画当初は予期していなかった次のような興味深い知見も得られた。すなわち、ソウダ節の音調に関する実態調査において、変異（中和）の進度に明らかな地域差が

生じていることを見いだした。特に無アクセント地域では中和の生起頻度が際立って高く、首都圏（南関東）をはるかに上回る勢いで変異が進んでいる。（新型 = 起伏化した中和音調・在来 = 平板を維持した従来の音調）

表 2. 地域別にみた中和生起頻度の差(ソウダ節)

地域	新型(%)	在来(%)
南関東	36.9	63.1
無アクセント	59.2	40.8
関東周辺部	20.6	79.4

この萌芽的知見は、「首都圏に生じた新たな形式が周辺地域に波及する」といった従来型の素朴な言語変化モデルが、この現象に関してはまったく通用しないことを示唆して余りある。上述の傾向が把握できたのは現段階ではソウダ節のみであるが、今後はほかの式保存型付属語においても同様の動態が観察されるかどうか、注視していく必要がある。

<引用文献>

- 相澤正夫（1992）「進行中のアクセント変化 - 東京語の複合動詞の場合 - 」『研究報告集』13, 195-265, 国立国語研究所.
- 稲垣滋子（1984）「アクセントのゆれに関わる要素について」平山輝男博士古稀記念会編『現代方言語学の課題 2』東京：明治書院, 281-307.
- NHK 放送文化研究所編（2016）『日本語発音アクセント新辞典』東京：NHK 出版.
- 塩田雄大（2013）「NHK アナウンサーのアクセントの現在 - 複合動詞を中心に - 」相澤正夫編『現代日本語の動態研究』東京：おうふう, 236-258.
- 三樹陽介（2014）『首都圏方言アクセントの基礎的研究』東京：おうふう.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 那須昭夫	4. 巻 22
2. 論文標題 付属語「たい」の音調変異	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 筑波日本語研究	6. 最初と最後の頁 1-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Nasu, Akio	4. 巻 22
2. 論文標題 A recent tonal neutralization in Japanese auxiliaries and the prosodic size factor	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Phonological Studies	6. 最初と最後の頁 91-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 那須昭夫	4. 巻
2. 論文標題 ナガラ節における音調の形成と変異	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 音韻研究の新展開	6. 最初と最後の頁 253-288
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 那須昭夫
2. 発表標題 形容詞語幹の音調指定解釈
3. 学会等名 第14回音韻論フェスタ
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 那須昭夫・菅野倫匡
2. 発表標題 式保存型付属語の音調変異と韻律最小性
3. 学会等名 第13回音韻論フェスタ
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 那須昭夫
2. 発表標題 ソウダ節での音調中和にかかわる構造的・地域的要因
3. 学会等名 日本語学会2019年度秋季大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 那須昭夫
2. 発表標題 音調中和の進行動態と制御機序
3. 学会等名 東京音韻論研究会12月度例会（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----